

清個数も LADG の D2 郭清例が少数 (25 % vs 58 %) であるものの, ODG の D2 郭清例と比較して差を認めず, 郭清リンパ節合計個数でも両群間に差がなかった. LADG 群の 265 例中, 進行癌は 41 例 (T2N0 : 23 例, T2N1 : 10 例, T2N2 : 5 例, T3N0 : 2 例, T3N2 : 1 例) であり, リンパ節転移例は 27 例 (T1N1 : 7 例, T2N1 : 10 例, T1N2 : 4 例, T2N2 : 5 例, T3N2 : 1 例) であった (両者の重複を含む). これらのうち再発例は 3 例 (T1N2 : 肝転移 (15 ヶ月), T1N2 : # 16 転移 (19 ヶ月), T2N2 : # 16 転移 (10 ヶ月) であった. LADG 群と ODG 群の再発率を比較した場合, 進行癌では LADG 群 vs ODG 群 = 1/41 (2.4 %) vs 5/63 (7.6 %), リンパ節転移陽性例では LADG 群 vs ODG 群 = 3/27 (11.1 %) vs 5/41 (12.1 %) であり, ともに両群間に差を認めなかった.

【結語】術前診断 T1N0 胃癌に対しての LADG は 1, 2 群のリンパ節郭清個数, 再発率の点では ODG とほぼ同等の手術と考えられる. また, pN1 症例に対しては観察期間が短期であるが再発例は無く LADG の適応と考えられる. 一方, 再発例はすべて pN2 症例であることより, pN2 症例は LADG の適応外と考えられた. T 因子に関しては腹腔鏡下の操作による腹膜播種の可能性の少ない T2 までが妥当と考えられる. 以上より, 現段階では T2N1 までが LADG の適応であると示唆された.

## 9 胃癌 ESD 周術期の危険因子の検討

古川 浩一・米山 靖・濱 勇  
河久 順志・横尾 健・相場 恒男  
和栗 暢生・杉村 一仁・五十嵐健太郎  
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

【背景と目的】高齢化社会への移行を背景に循環器, 脳血管, 血栓性血管疾患領域において急速に抗血栓療法対象者の増加がみられる. 一方, 低侵襲的内視鏡治療として ESD は広く認知され普及している. これらの背景をふまえ抗血栓療法な

らびに後期高齢者と ESD の周術期管理の関係につき検討する.

【対象と方法】対象は 2003 年 12 月より, 2008 年 9 月まで当科にて根治治療を目的とし胃癌, 胃腺腫にて ESD を施行した 384 例.

①術後出血の因子として抗血栓療法, Asp の関与とヘパリン化による対応ならびに患者側の因子, 術者因子, 処置因子を検討対象として集計. 多変量解析にて有意な後出血関連因子を抽出し, オッズ比を算出する.

②75 歳未満 A 群 264 例, 75 歳以上 B 群 140 例での合併症に関する危険に因子を多変量解析にて推察し, 特性をふまえた ESD 周術期管理を検討する.

### 【結果と結論】

①抗血栓療法に対する日本内視鏡学会ガイドラインに準拠することで血栓症イベントを予防し, より安全に胃癌患の ESD を遂行することが可能であった.

②ワルファリン非使用抗血小板療法例においてもリスクに応じたヘパリン化等の血栓予防を講じた対応が望ましいと考えられた.

③ESD 自体は後期高齢者においても低侵襲治療として実施可能と考えられた.

④周術期合併症としては術者の力量や経験が術中合併症や穿孔に反映されやすい.

⑤透析や切除範囲など潰瘍の創傷治癒の遅延を考慮した対応でさらにリスクの低減がなされる可能性が示唆された.

## 10 胃 ESD 症例からみた同時多発胃癌のまとめ

原田 学・入月 聡・河内 邦裕  
大山 慎一・山川 良一・味岡 洋一\*  
下越病院消化器科  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
分子・診断病理学分野\*

症例は 66 歳男性. 2007 年 9 月下旬, 健診の上部消化管内視鏡検査にて胃体中部後壁に 15mm の発赤陥凹と 3mm の発赤陥凹が認められ, 生検にて高分化型腺癌と診断された. 同年 12 月中旬

にESDが施行された。ESD施行前には病変は2か所と考えられていたが、ESD施行時に胃体中部後壁に近接して3個のⅡc病変が認められた。3個のⅡc病変は一括で切除され、偶発症は認められず経過良好で退院した。切除径は47×36mm。病理診断は①Adenocarcinoma (tub 2), m, ly0, v0, pLM (-), pVM (-), type 0-IIc, 7 mm ②Adenocarcinoma (tub 2 > por 2), m, ly0, v0, pLM (-), pVM (-), type 0-IIc with U1-IIc, 23×9 mm ③Adenocarcinoma (tub 2), m, ly0, v0, pLM (-), pVM (-), type 0-IIc, 5 mmの一括切除であった。ESD施行後10か月が経過し、再発は認められていない。

早期胃癌において病変多発の頻度が高いことが明らかにされている。2007年2月～2008年9月の期間に当院で施行されたESD全103例中21例(20.4%)に多発胃癌が認められた。当院における多発胃癌症例についてまとめ報告する。

## 11 胃癌における血清 p53 抗体の検討

吉岡 大雄・加藤 俊幸・佐藤 俊大

佐々木俊哉・船越 和博・本山 展隆

県立がんセンター新潟病院内科

発癌過程において癌抑制遺伝子 p53 の変異や欠失によりアポトーシスを抑制されることが癌発生とその後の進展や再発に関与しているとされている。癌の早期から p53 の変異が高率に生じ、発癌への過程やその後の進展に関与し抗癌剤感受性関連因子としても注目され、免疫組織学的に検討されてきた。近年、がん細胞の p53 異常タンパクによって惹起される血清中 IgG 抗体を検出する血清 p53 抗体の測定が可能となり、大腸癌や食道癌などにおける早期診断から予後、抗癌剤感受性との関連などについて、その臨床的意義について検討されている。

胃癌においても早期から p53 の変異から *H. pylori* 感染性胃炎から発癌への過程やその後の進展への関与も注目されている。胃癌患者における血清 p53 抗体を測定し、臨床病理学的因子との関連性を検討した。胃癌全体で 20% の陽性率であ

った。早期の Stage I でも陽性症例を認めることから腫瘍マーカーとして有用であると考えられた。さらに切除後および除菌療法前後の変動について検討したので報告する。

## 12 胃癌治癒切除後再発症例の検討

石川 博補・田中 典生・塚原 明弘

丸田 智章・小山俊太郎・武田 信夫

下田 聡・池田 義之・細井 愛

県立新発田病院外科

胃癌地域連携パスの作成を視野に、当科における胃癌治癒切除後の再発死亡症例を検討した。1997年4月から2006年4月までに手術が施行された989例中根治度A、Bが得られた830例の内、再発死亡した78例(9.4%)を対象とした。年齢は平均66.5±11.1歳、男女比1.4:1であった。無再発生存期間(RFS)は中央値341日、術後3年までに74例(94.9%)に再発が確認された。再発後生存期間はMST 209日で、最長4年であった。初回確認時の再発形式は、腹膜播種27例(34.6%)、血行性25例(32.1%)、リンパ節24例(30.8%)であった。腫瘍マーカー(CEA, CA19-9)の上昇は、44例(56.4%)に認められたが、再発角確認より前の上昇22例(28.2%)、確認と同時の上昇10例(12.8%)、確認後の上昇12例(15.4%)であった。以上の結果を連携パス作成に利用したい。

## 13 早期胃癌の発見および範囲診断における当科での工夫 — 酢酸撒布後インジゴカルミン色素内視鏡の有用性 —

米山 靖・河久 順志・濱 勇

横尾 健・相場 恒男・和栗 暢生

古川 浩一・杉村 一仁・五十嵐健太郎

月岡 恵

新潟市民病院消化器科

特別な設備投資も要さず安価に安全に内視鏡診断能を向上させる観察法として、近年「酢酸撒布法」が注目を集めている。本法は早期胃癌の中で